

丁丑雜記

五

昭和十二年五月下旬起筆

特別
14
1919
486



丁丑雜記

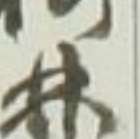
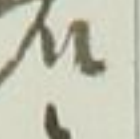

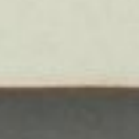
昭和十二年五月下浣起筆

○藤田鎮造君は近若銀座百法を穿ててきた
其の内の如き一法が收めてある

以て七年抄竹二丁目橋邊に大地、道を
いと落着けろくろく二本を灯し、小札を前、毎
お寺の鐘を放つて、曲り馬路を、ハ大橋を
渡り、年齢十一二のあやう、海神の
あまのついで、柳北が、何心も、まじまじと
耳をこき、こき、小僧の癖に、海神の
あまのついで、其の味と、人の肩を、


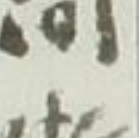






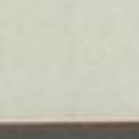


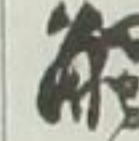
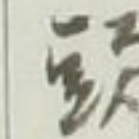

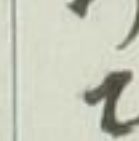
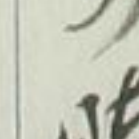
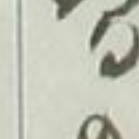

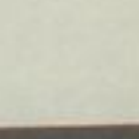


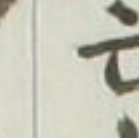

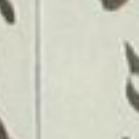
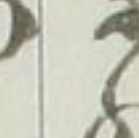


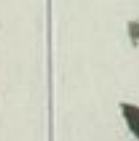



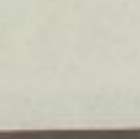





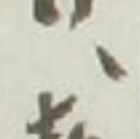





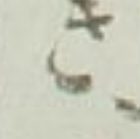

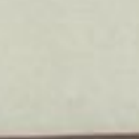


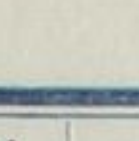
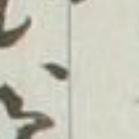



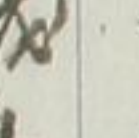
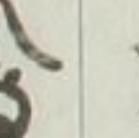
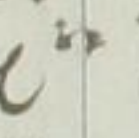


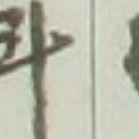

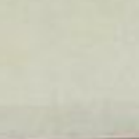


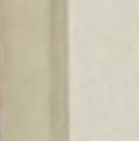

















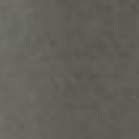
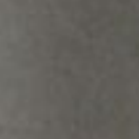




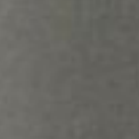









堂玉合川 (會辰戌) 春の鳥

小僧の坊の所をのぞき込めんと、怒つちいたりの、其の志母
と見えきよふが例、その比が、まんの見をてのちる婦
人が、無常帯旗のハ落跡の一人何某の志母の柳
北も、うつて世路、さうつに、このちる婦人の口を、
一と孫の舌、まゝのんちあつ、このか知ん、柳北、相
ひ多、地を、まゝして、北の大道、洋智の、帰へ、行
あともつて、こゝして、時をつきとめ、柳北、自
相尋ね、おき、サツ、不意、と、備へ、
き、柳北、感涙の、泣り、其の、日、から、生計、を、
こそ、廿二、少年、と、一人、前、の、海、後、の、
名人の、許、の、入門、と、後、の、梅、林、柳、右、と、名
乗、り、活、漫、界、の、一、旗、幟、を、村、の、こ、ゝ、あ、つ、た、と、



柳右の柳いさよの字も、柳北の一字を取
へたのがある。(女文、長いが要約也)

○おの、前、の、江、成、の、葬、儀、久、方、振、り、市、松、和、太、郎、と、今
して、久、岡、と、叙、し、な、か、二、三、日、と、往、り、方、松、の、急、死、を、
き、一、筋、を、、、、、、、、、、、
て、誤、つ、て、電、車、に、、、、、、、、、、
に、死、亡、し、た、と、、、、、、、、、、、、、
最、初、の、卒、考、を、、、、、、、、、、、、、、
記、者、生、活、を、、、、、、、、、、、、、、、
出、身、記、者、の、才、一、部、が、、、、、、、、、、、、、、、、
人、が、、、、、、、、、、、、、、、、

進みあふを失ふの概歎に堪へず。

○夫は鏡中より道通の門に遊び道通に新淑し文名を
環遊更家おあると云ふ一時の流石も昔の文壇に名
を轟かせしこと七十年が久しいこと遠く今に忘れぬものあり
自今いその名を聞く切りきく道通の流石を得るも
が前り道通祭を催し時出席し比も初見今時一十年
ハ七十五歳と云へたが、さういふ許上手む老人といふ
ず、時々の流石も交へて流る所、流石と文壇人の面々
も存しとぬ。

○待た後を人々も、吉原不職原の記本も言ふ、
のまは評判記も職原の擬し所、音響か
の内容も左の如核も一組を記す。

標原製

序文の「おほ

やけの官位を定る書物を職原といへり、さればそのみ
なかに尋ねて、流をたつる下々の位を定めし草子な
れば、吉原下職原と是を名づくる」と、跋文の「人來
問曰客下職原者、貴人官位假奪而遊女卑職警、我聞職
原在女官何其以女職、遊女下職不書乎、答云在職原女
官世人知之希、今撰所雖非女官世舉知故准是云」とあ
るにて、その趣向の由て來る所を知るべし。故に遊女
に配するに「大上大身正一威 太夫高尾、大那言從二
威 格子青柳」或は左右大身、大中那言、參儀などの
文字を以てす、その品位によりて、それ／＼百官の名
を附し、次位の遊女には「無官新造之次第」として、
その項目を分ちたり。收むる所の太夫十八人、格子七
十二人、新造三十六人を月旦するに『吉原袖鑑、同譜
嘲記時之太鼓』の例に准ひ、本書には格子の四天王、
四大納言、また若四天王を撰み、更に前年刊行せる『吉
原芥川』が、三浦山本兩家のために曲筆せるを駁撃し、
自ら公正不偏なるを以て高しとせり。かゝる手法は、
既に早く野郎評判記に創められ、寛文度の『野郎古た
ゝみ』と『難野郎古たゝみ』(假題)、『野郎天邪鬼』と
『野郎毘沙門』など、難陳答問せるもの數四出でたり。
當期の類書はたゞに吉原を透視するに止まらず、時代
の世相風俗を察知し得る所に價値あるなり。

西洋好事本展覽會略目

□本略目は別記西洋好事本展覽會に出陳中より採擇せるもの、珍書あり、奇本あり、怪書
あり、魔書あり、其項目を擧ぐれば看板廣告、迷路(八幡の籤知らず)、爪楊枝、あやと
り、火と焔、洞窟、暦、水の映像、明滅漫畫、棉の傳説、若者と娘、ローマ水道、アラ
ビヤの井戸、アラビヤ數字、ハレム、消防、世界災厄史、潜り、花火、鍊金術、選舉史、
放送局、性、糞便學、割禮、貞操帶、性器及大蛇崇拜、鞭打ち、醫學史、藥物史、おぼ
け、惡魔、魔神、おまじなひ、迷信、夢、墓、葬式、屍體發掘、燒場、紋章、姓氏、
Signs, Symbols, 侏儒、サーカス、見世もの、ジブシー、乞食、浮浪人、服飾、帽子、
ステッキ、美粧、博物館、乗もの、切手、武器、指輪、古錢、玩具、ベル、名鐘、煙草、
酒、珈琲、茶、釣、賭博、富籤、動物文學、カルタ、デスマスク、民藝、あやつり、風
景等々。

五月廿五
日丸
西洋
書本展
覽會
目録
一
冊
切
略
目
也

History of the Horn Book

By *Andrew W. Tuer*

With 300 Illustrations. (19×26 cm.) pp. xvii, 486. London, 1897.

¥ 42.00



エリザベス女王使用の
銀製ホーン・ブック

◆ホーン・ブックとは何か。いま刊行される教科書出現以前にアルファベットから主の祈りまで、初學の見習に文字を學ばせるための道具であつた。取手のついた文字板を捧げつつ、之を誦讀し語記する方法は、十五世紀頃より行はれ十六世紀に到つて一般化された。彼の大沙翁さへも、一度はかかる教程に依つて文字を會得したかと思へば、古きホーン・ブックも單に教育參考資料としてのみは見過ごされない。しかも教育關係の圖書館には一の所藏品さへないといふ程その遺物が少い折柄、著者が博搜探訪して多くの現物を求め、その形態の變化時代的異同の詳細を傳へた本書の如き、寔に珍重すべき業績と云はなければならぬ。教育専門家にとつて重要な一研究たるは云ふまでもないが、西洋寺小屋の童幼教へ草としてまた識者のために興ある話題を供する讀物である◆

考し西洋に日本
の子板抄のよう
字を教へる。さ
ホーン・ブック
丸善の陳列。宣
お二三出てぬ初
り

○銀葉百流のゆゑ大氏まゝ洋服屋が流行り盛ん
あつたが、そのゆゑ。日全モールの大礼服を起つた
大氏であつた。その室内省の流行をつとめた。山崎法
市の時も、大氏の靴坊のあつたと来た。その時
まゝ一個の靴坊のいふと、その切んが屋法市は
ある。その二階を借りて大氏が靴坊のあつた。その
七場をかまへ、その靴坊のいふと、その切んが屋法市
彼等が古きとせ、そのゆゑ。日全モールの大氏まゝ
女部とせ、そのゆゑ。日全モールの大氏まゝ。その
途が、そのゆゑ。日全モールの大氏まゝ。その
内省のいふと、大氏があつた。そのゆゑ。日全モ
れから、大氏も切りうゑ。そのゆゑ。日全モールの大氏まゝ

が好むべき入つたことである。今の松竹居のところが大民の
居りありし、大がう大空の内は、大礼服を着用する人形が
ゼンマイ仕掛し回轉しつゝおれごとが、妻若も眠るゝ氣に
記憶がある。

の目ら九州没色中の村山秋浦の紀前空仙の園と
貴位の居るすたの二詩を録す

呼声叫の似登様湯おる山次夫低、躑躅死
開三十里、白中深、雲杜、鈴、啼

予二五道長海、此き、さ、七、懸、二、雲、仙、に、列、く、す、今、二、道
ん、の、遊、戯、と、す

の此の午後突如田中光顯の石洞を多く、伯の玄關、主
つて、ま、歩、在、す、と、云、つ、く、考、の、例、の、如、く、雨、を、降、す、伯、の、訪、り



このころが初なるあつたこと、少くも自分の無沙汰を
極め、長き、相訪を多々付、あ、あ、あ、と、し、以、無、聊
ま、坊、く、の、う、れ、今、石、里、子、を、訪、問、し、比、が、身、休、を、抱、く、も
氣、の、ま、盡、び、ある、と、決、え、た、伯、も、子、も、九、十、を、起、す、子、の
伯、も、二、三、歳、差、し、と、云、ふ、に、付、亦、伯、の、方、二、三、歳、か、ん、優、る、
伯、の、あ、つ、く、耳、が、遠、く、さ、う、さ、う、も、弱、く、元、氣、が、旺、盛、と、す、
伯、の、あ、つ、く、自、分、も、且、脚、の、穴、形、も、な、る、詩、も、歌、も、無、聊、を、語、す
其、ま、ま、も、筆、力、は、な、る、詩、を、能、く、し、う、い、和、歌、の、時、に、や、つ、が
あ、つ、や、ま、行、か、ぬ、と、決、ま、る、余、も、拙、若、拙、若、出、版、毎
に、望、ま、る、を、常、と、し、道、漫、と、す、を、お、の、と、し、て、あ、る、が、
杜、撰、の、拙、著、を、又、せ、な、る、う、い、の、出、版、の、成、つ、と、も、送、本、し
ま、い、の、七、若、干、あ、る、が、ま、あ、り、一、四、年、来、出、版、し、た、ま、あ

三冊を呈した。伯い妻人が「懸肝録」を一瞥し、懸肝とい
何んぞと問ひきか、巻頭の序に「説の公」と云ふに
ら、咄嗟と後、一矢をえん。

○銀座の「夷書」七巻分といふは、昔「業」をよめ分
誌七巻の「太政官御用」と標榜し、東京の「江戸」の目録に
い建物をと高田恒の「其時」の「島田恒」の例を
とせんといひ、一時「時」の「恒」の「島田恒」の例を
とせ、此の「恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を
大助も、宮内省御用の「大氏洋股」の「水や飲料」
とせ、つらぬ「恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を
料理の「恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を
とせ、つらぬ「恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を

漢字製

か成りし、この「恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を
具悉、福原百治の「資生堂」をいふ、今「恒」の「島田恒」
構ひし、この「恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を
事業家、この「恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を
中央の「戦場」の「恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を
も「恒」の「島田恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を
「今」の「恒」の「島田恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を
東京府の「蓮根」をいふ、この「恒」の「島田恒」の「島田恒」
恒府百治の「勸」の「恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を
○此年出版「石里子」の「恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を
か「恒」の「島田恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を
ノートを取つた、其の「恒」の「島田恒」の「島田恒」の例を

ある。石里子、旧名平野、席大平、石里、若家の姓、
あり、席、川、つ、ゆ、あり、を、垣、太、中、も、云、ふ、也。此人、片、貝、
の人、也、古、年、の、日、時、家、殿、と、聞、き、御、年、の、よ、く、孝、侯、を、
教、く、此、と、も、あ、り、其、氏、の、名、を、生、の、内、に、井、上、田、子、か、あ、
つ、也。井、上、浦、村、の、よ、み、か、し、石、里、と、同、村、也、と、云、ふ。田、子、日、
南、方、の、郡、の、あ、る、の、に、地名、を、割、つ、此、の、地、が、初、時、の、名、を、懸、
帯、と、云、ふ、也、此、の、初、め、も、あ、る、所、也、あ、る。石、里、も、古、く、斗、時、
の、尊、王、權、太、夫、の、志、士、也、あ、つ、也。家、山、を、松、代、と、改、め、り、
其、氏、は、家、山、の、雷、電、の、碑、を、石、里、に、置、ん、だ、り、也。初、時、
山、に、あ、つ、た、時、何、の、用、也、尋、ね、ん、に、ゆ、か、れ、也。あ、る、に、注、
魚、を、見、れ、と、云、ふ、未、だ、と、云、ふ、禰、の、言、を、見、な、し、此、と、か、ん、と、
あ、る。洋、務、の、第、四、上、と、云、ふ、也、其、の、を、望、望、鏡、と、見、誤、



つ、此、も、石、里、也、あ、つ、也。石、里、の、就、と、云、ふ、に、送、以、柳、見、仙、
と、云、ふ、人、也、あ、つ、也。石、里、は、此、業、の、速、成、を、欲、し、教、正、骨、子、送、
名、念、の、門、人、也、ん、と、云、ふ、也、か、あ、る、也。名、念、と、論、を、見、し、思、
ひ、止、ま、り、也、此、と、も、云、ふ、也、石、里、の、名、聖、年、と、し、て、松、本、順、
松、本、信、常、と、云、ふ、が、あ、つ、也。石、里、は、人、と、い、ひ、其、の、配、ら、る、在、つ、也、石、里、は、送、
丹、術、も、成、印、也、也。高、野、行、政、も、成、印、し、陸、軍、の、軍、醫、監、と、
あ、つ、也。大、西、郷、の、軋、輪、妙、師、り、也。紀、大、山、あ、る、の、に、病、の、故、と、云、ふ、
帝、心、配、也、也。勅、方、を、以、て、外、送、ホ、マ、ン、を、冷、察、と、云、ふ、也、向、
け、て、是、以、時、石、里、は、此、区、を、傳、へ、大、西、郷、の、其、時、自、ら、占、灸、を、せ、り、
と、云、ふ、也。勅、方、を、云、ふ、を、の、こ、と、を、氣、取、り、よ、か、け、ず、倦、ん、病、は、灸、
を、愈、へ、り、と、云、ふ、也。冷、察、を、松、本、の、勅、方、と、云、ふ、也、
石、里、の、初、め、を、見、し、冷、察、を、受、け、れ、り、と、云、ふ、也。揮、注、

いおせりて感ずん。亦亦治意の意難の時も在里が関係と
多分の逸流がある。梅酒等の見入就て一説に抄とん
みよ見の梅錦之丞と云ふと眼科の亦亦大いありて其の
洋行を命せんと時、まを訴へ此理由が、借金の為めか
此亦利と借入利息が積んて千四百五圓の大なる借入を
擔ふおれは、在里初めか、融金して仕立をつけられ、出
るふ亦十字のこともいりて出せぬが、亦初十字が忌み
丸のむ、当初一の字を紅色の列表に帽の徴とせしめ
とみ出せぬ、大正天皇の着後、婦の清和も左の如くも
初めを拜する所あり

白天婦の氣方雄偉得微章十字回如、一志廢
創盡心力、回生不流救功

在里市へは頼まんと日比谷が國と改井し此人に在里の
りことも初めを知つた。亦亦初年上等の境内、病後と改
せんとい時外道ボートイン、其議を述べて、此境内を
他の公園等とせしめ、病後、人の忘むよ、此から
見るよよと改め改めをいける、と改められ在里は
今、公園設計を頼まんと一説に改めると引寄せれども
亦亦が費府の出給して、いりて視察をせよ、此法の内
税関と改められ陸の揮法が氣をなす。税関、税も
税務の役員が、いんる人が一番高の給料を取つて
なると改められ、酒類を鑑別する者が、此亦高給
れと改められ、此の鑑別する一行酒をぬき、
亦の持主は改められ、酒類を鑑別する者が、此亦高給

減るんといふ酒々あるを懐も附するといふも同じこと此
 が鏡刺の言又出遇ていからいふの。此の監査む税額か
 成るの増減かあるのむ。まゝ高い給料も掛ふのむ。毎
 理七等の。と一夫一婦。高貴府中視察の一笑話。此地の
 便の仕末を庭合深更よやるのむ。えんと視察しれ所は
 受託者の眼と觸れ。日本から来た官吏のゆる運中の糞
 便車よ附着ある米多くと積り出すんのか聞はし
 とあるのむ。滑稽なる也。
 貴府の府の當り石里子よ外交官と云んと勅められた子
 自ら書いてたが。あつても子の山崎滑稽。且つ外交官
 らもあの人と係し。何れも如才と云て。過ぎも。自分か却
 つてするんといふ。



子孫の自慢の山崎公押通の扁額「措手懸崖」の四字
 ハ、九か、漢法通が生涯難い。或る代表ハ人々東京に流
 せし、漢法も落し。す所以と叩いた時。子孫の其處
 二高し巧又々。変現しれ。こゝを。落めれ。又びあることを。傳
 せ。後人が好む。初め。

○時々の政局は真に不安を極め
ある、林首相の少少の意向を多
せんとして、その紙に於ても自
分の云々として、所を云々する

放言録 五月廿七日

右翼陣營の妄動
新黨結成が先決問題

興黨とは名ばかりで實際には政府を訪問し之を殆ど入れ代りに同じ支持力なく政府の方でも却つて右翼陣營に属する井田豊祐男、小昭和會が所説行くべき途を行つて日置してつたあとへ近頃急に右翼の人々の來往が頻繁となり政界が注目して右翼陣營の動向に注がれる様になつた。最近右翼の代表的人物と目される建川美次、小林省三郎兩中將が林首相

とて恐らく「珍客ようこそ」とばかり下へも置かぬもてなしをした事と察せられる、それにしてもこの四人の珍客の中井田男を除いた他の三人の肩書きを持つ三人は何れも越後人であると言ふ事は偶然とは言へ一寸不思議な話だ、知らぬものが聞けば越後は丸で右翼の本場の様に思ふかも知れぬ。

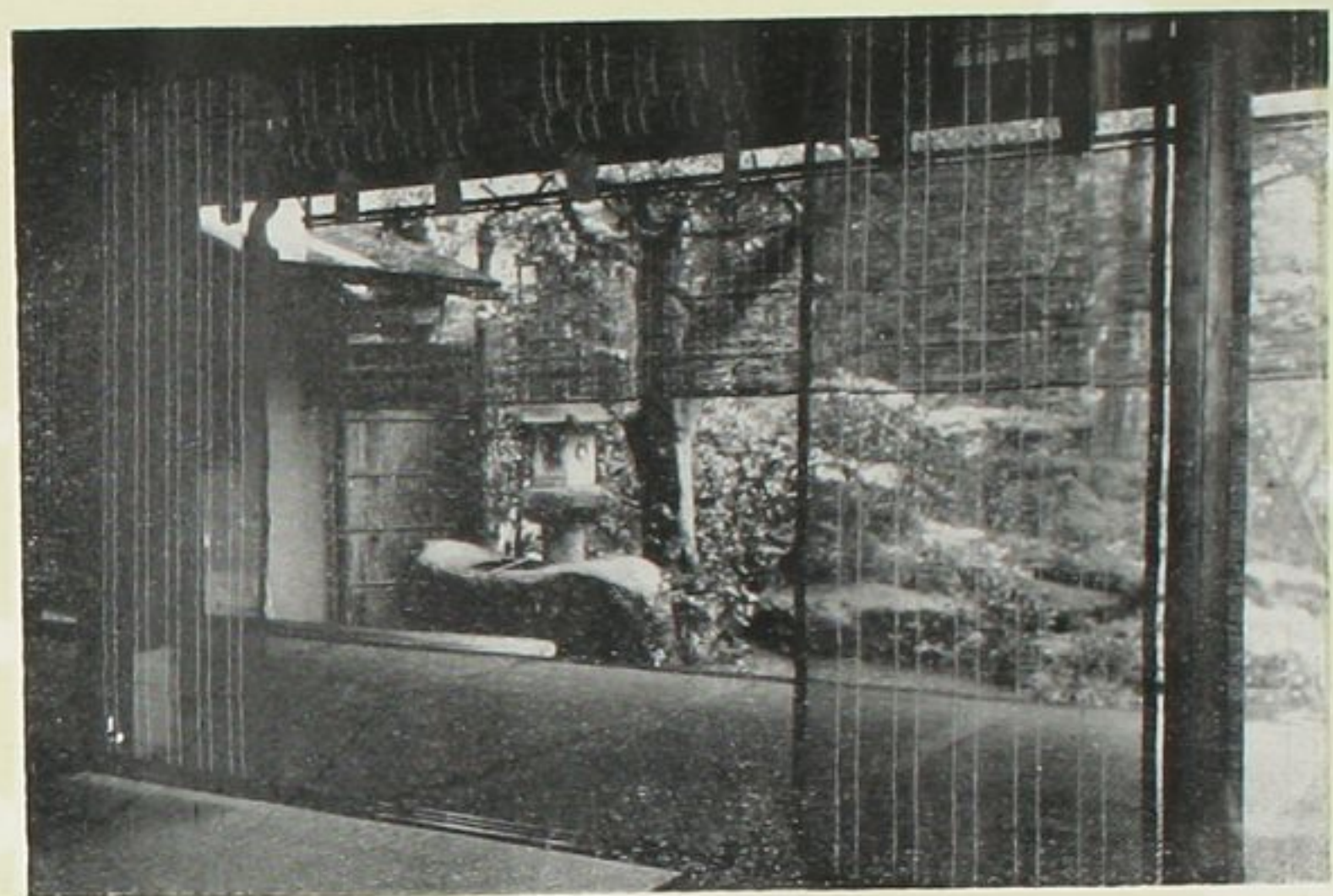
「林内閣頭張れ」と言ふが然らば一體如何なる方法で頭張らせるの下に既に退陣を命ぜられて居るのにこの判決を不服として何處に挑戦するの態度である、苟くも立憲政治の本體を多少なりとも解へて居るならば到底大きな聲で「林内閣頭張れ」などとは言へない筈だ、政黨に向ける聲はあつても立憲政治に向ける聲はあり得べからざる所である右翼陣營の人々は一體政黨に向ける聲を聞かへて立

と見られる、右翼陣營の意向として傳へられる所に依れば「政府は政黨の倒閣運動に屈する事なく特別議會に臨み議會に於て政黨から不信任案が提出された場合には断乎再解散を行ふべし」と言ふのがその根本的の態度である、従つて林内閣そのものは二の次として固く政黨の行動を無視せんとするものが第一の目的であつて林内閣は結局御前立本尊たるに過ぎない

憲政治に向けてある自らの誤謬を認識しないのだからか。右翼陣營の人々が今日の政黨を誤謬せんとするならば正々堂々と政黨に向つて挑戦し來るべきであらう、既に政黨を挑戦する途は右翼政黨を結成して國民の前で堂々一戦を交へる外に方法はない、林内閣を頭張らせ度かつたら林内閣の議會に於ける生命を擁護すべき政黨を作つたが上から、建川中將は新黨樹立には出來るだけの援助は各まねと言つてゐるが林首相自身に新黨樹立の意氣込みがないとすら先づ、わいより始めの上で建川氏自ら率先して新黨樹立の先陣者となつてはどうか林内閣を御前立として政黨に附く様なやり方は危険姑息、決して武人にとるべき態度ではない、林内閣が如何に頭張らうとも、何處解散を行はうとも既に政黨と對立する政黨が出現しない限り現在の政黨は恐らく貧乏極まりないであらう。

藤原

○時の政局は真に不安を極め
各地の風土や物産を陳列し時々
出してゐるが、格お鼻を
御出のさび概ね
紅毛の三條の皮に
見ると、馬の書七
この七五の、お南
杯三出るの腹巻
遠視相飲の、梅井
お飲のよ、つる出
今成る、今成家
廿五代前の重殿



が梅を留まらぬ地獄に似、新年の首に甲州二枚友
 合の馬を誰か臨みよふまのむ、自分と金子公路人れ
 ことふと思ひ出す、金子の行状人が筑後と号し、予は
 福谷の横に因心春成と号し、行儀の家系は打揃
 向の信玄の縁にあり、甲州の攻めこむ、其の
 款通と受けられたり、と云いぬむ。筑後の
 客殿の人のあつたが、温藉の思想の御いふ、あつた
 の、張の心服も持った、其の如く、思の上の花屋を
 出したことが、金子を、あつた、因心、曰く、其を、持
 いよふ、あつた。

○郷里の治方、但合と、紀念碑、の碑文と、相喜を、花
 此き、其の、組合、其の、地方、言、其の、其の、其の

セトキ此書簡の左の如くである。

(冠者) 陳善誠の唐突の儀と候へども本組合の希
賢知に由りて福治湯内園及新井郷川沿岸舊
堀の外十二ヶ所打を淺河区域とす。組合と唐突
而して組合の使命は阿賀野川逆流防止及び
開門及松ヶ崎濱村今所跡等至要工事も完成
し昨年創立湯二十周年記念式も奉り行
右の如き開門の傍に記念碑と建設致すと
お申之が儀又并神慶と御祈すもよりき堀御
家最中東地、御塚に深き尊台と是れ御
上と衆議の方行、誠以御進意致のりとも、夜上
多むん何事御進行、祈りて奉る御奉



秀資辨の本組合の大因縁も、天王寺島家
御姉様と書、この御書に儀涼承取の御書

六月七日 新井郷川水害予防組合宛
地方官 務官 市松浦重

市島南吉殿

自今、此の御書と致し候へども、居らぬを未だ候し、
いじせ候し、ことりさる、候し。

○近衛公が頼朝大命を托して組閣すまふに、公の
家、昔より、河内家、前代百廣公、首在、
へき人と目さんとおれ、口く、亮をえん、候し、
申す、今の公が組閣すまふに、不忠儀、今の
公の政治的、御書、或、先代、承り、候し、

きかは便郵



通郵局刷印版内

六錢省信通

標原製

少年國史の葉

昭和二十年六月
第二卷附錄

早大出版部
早稲田大學
出版部

少年と日本國史

市島 春城

日本の如く開國以來二千六百年、
一系の天皇を戴き、會つて渝ること
なく、一貫の歴史を有することは世
界廣しと雖もどこにもない。之れが
日本の誇りである。日本の歴史は實
に吾等祖宗の歴史である。吾等は何
を措いても國史を知らねばならぬ。
歴史を知らねば、己が住む國土の有
難味が分らぬ。何故我が國體が世界

に誇るに足るかといふ意味も分ら
ぬ。どの國でも其の歴史は大切だ
が、取りわけ我が國に於て歴史は大
切である。

○
我が國は古今の史籍に富んでゐる
日本書紀・古事記を始めとして各代
にそれ／＼の史籍がある。浩瀚な通

○早大出版部前田氏の
少年日本國史の
冊が出版、その葉を
全文かねめし、ゆづ
上段紙切りぬきしこと

史も幾通りかあるが、多くは漢文に書かれてゐる事であつて大衆向きの史籍がない。殊に少年用のものが少ない。少年用のものとしては教科書に歴史讀本があり、趣味本位の断片的の史談やうなもの

第二卷のあらまし

第一卷で皆様が、心憎く思はれた藤原氏の専横も、御英邁な後三條天皇の御親政と白河法皇の院政とで跡方もなく潰え、茲に新しく武士階級が現れて來ました。前九年の役と後三年の役、それから約百年後に起つた保元・平治の兩亂で、新興武士に平氏の勢力は旭日昇天の勢で擡頭し、竟に藤原氏以上の豪奢無道を極めるに至つたので、併し「春の平家は久しからず、忠孝の臣重盛の物語や敦盛の悲話を残したまふ、壽永四年三月、西海の藻府と消えて、後に源氏の世が始ります。興亡盛衰定まらぬのが歴史のならひとは言ひながら、あまりにも眼まぐるしい變轉の世の相は、皆様の血と涙を誘ふに違ありません。輕妙な筆は史實を掴んで離さず、幕府を鎌倉に開いて自ら征夷大將軍の顯職に就いた源氏も血腥い別當公喚の物語に空しく散つて、日本國史の紛擾は第三卷北條氏の條にひき繼がれます。

はあがるが、纏まつた通史は無い。その無い所以は、少年に複雑な幾千年

の變遷を、面倒なく、娛樂的にすら讀ませて、大意に通せしむることが容易でないからである。これは今日始めて難きを感じるので、昔も同様で、學校などに、日本歴史を閑却しな一つの原因はこゝにあるのだが、此の缺陷を補ふのに、太平記や源平盛衰記・

太閤記のやうな軍書が用ひられ、また軍譚・講談といふやうなものも盛んに行はれて、少年の興味を惹き、不知不識の間に、少年ばかりか大人にまで國史を教へた。

如何なる少年でも楠木正成や源義經、豊太閤や加藤清正などのことは大略知つてゐた。少年の性はもと戦争のやうな陽気で活氣のあることを好むから、彼等は戦争中心に歴史に興味を感じ、赤本でも錦繪でも風の繪でも皆武者繪を喜んだ。彼等は學校の教育よりも寧ろ家庭に於て、寄宿に於て、貸本屋に於て歴史教育を受けたとも云ひ得よう。つまり娛樂の薰陶が意外の効果を擧げたのである。

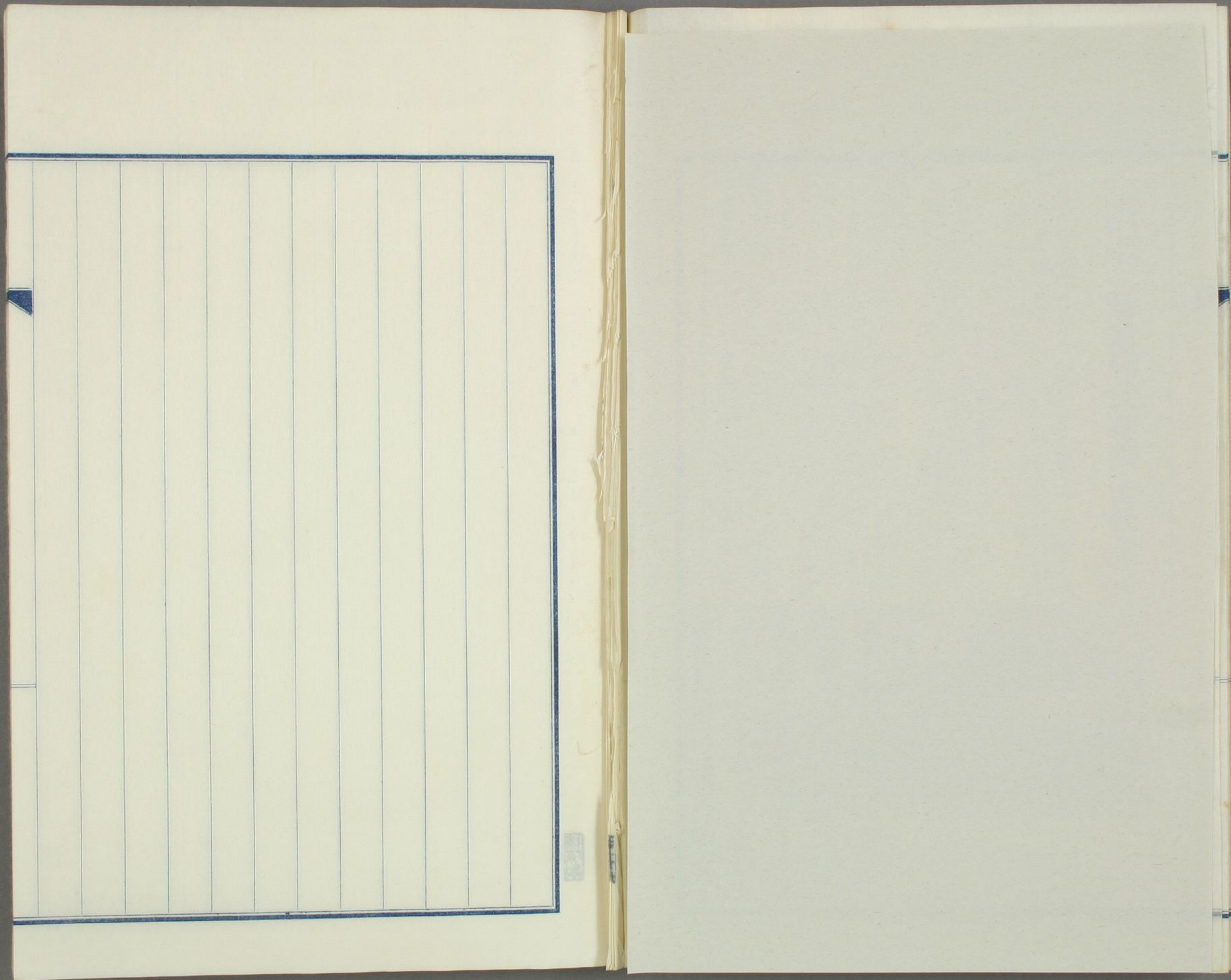
併し、戦争ばかりが日本の歴史事項ではなく、それよりも何倍か重要な國家興隆の推移を、簡約に少年に會得せしむる事が肝要である。西洋でも少年用の歴史編纂に苦心してゐるが、偶々吾等の青年時代、パーリーの萬國史やグードリッチの英國史、佛國史などが、我が國に齎された。その書き方の簡明であるため、初歩の我が國洋學生が之に由り世界歴史の概要を知つて、それが生涯頭に残り、如何にそれらに負ふ所が多かつたかは、後のギボンやマコーリーの歴史を忘れても、吾等の忘れ難いものであつたことに由つても知られよう。これを思ふ時、少年用歴史の名著を吾等は欲して已まない。

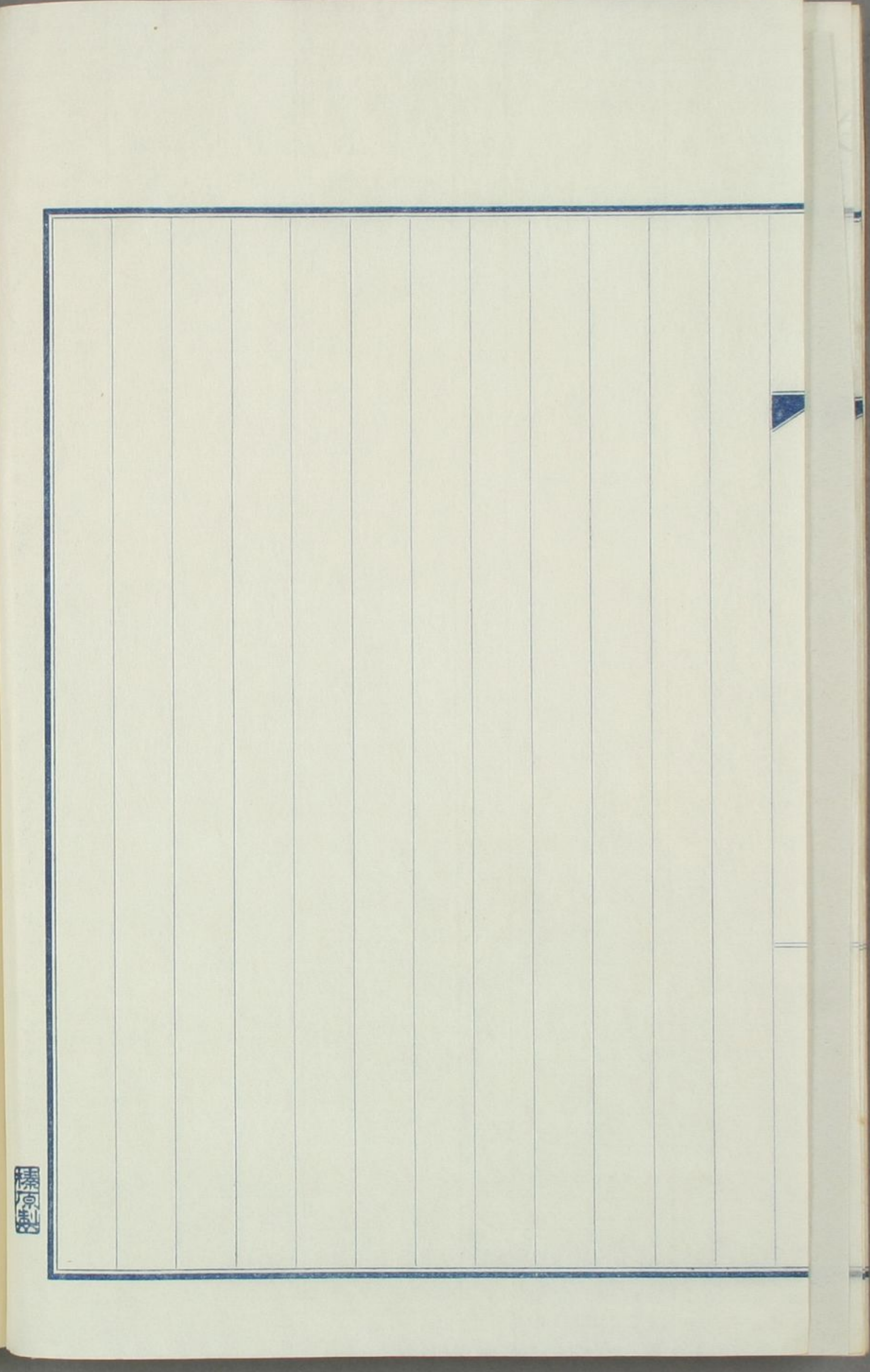
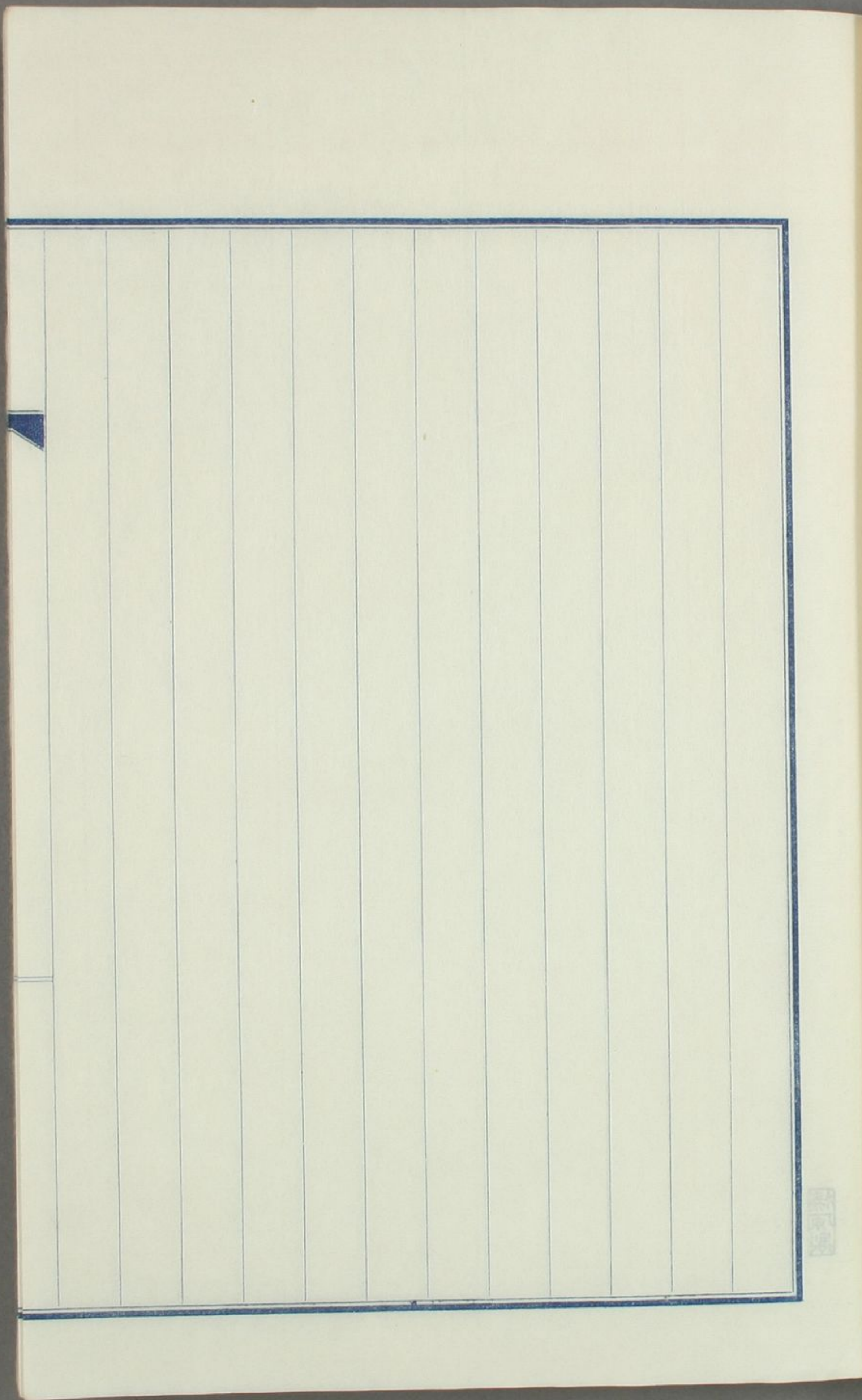


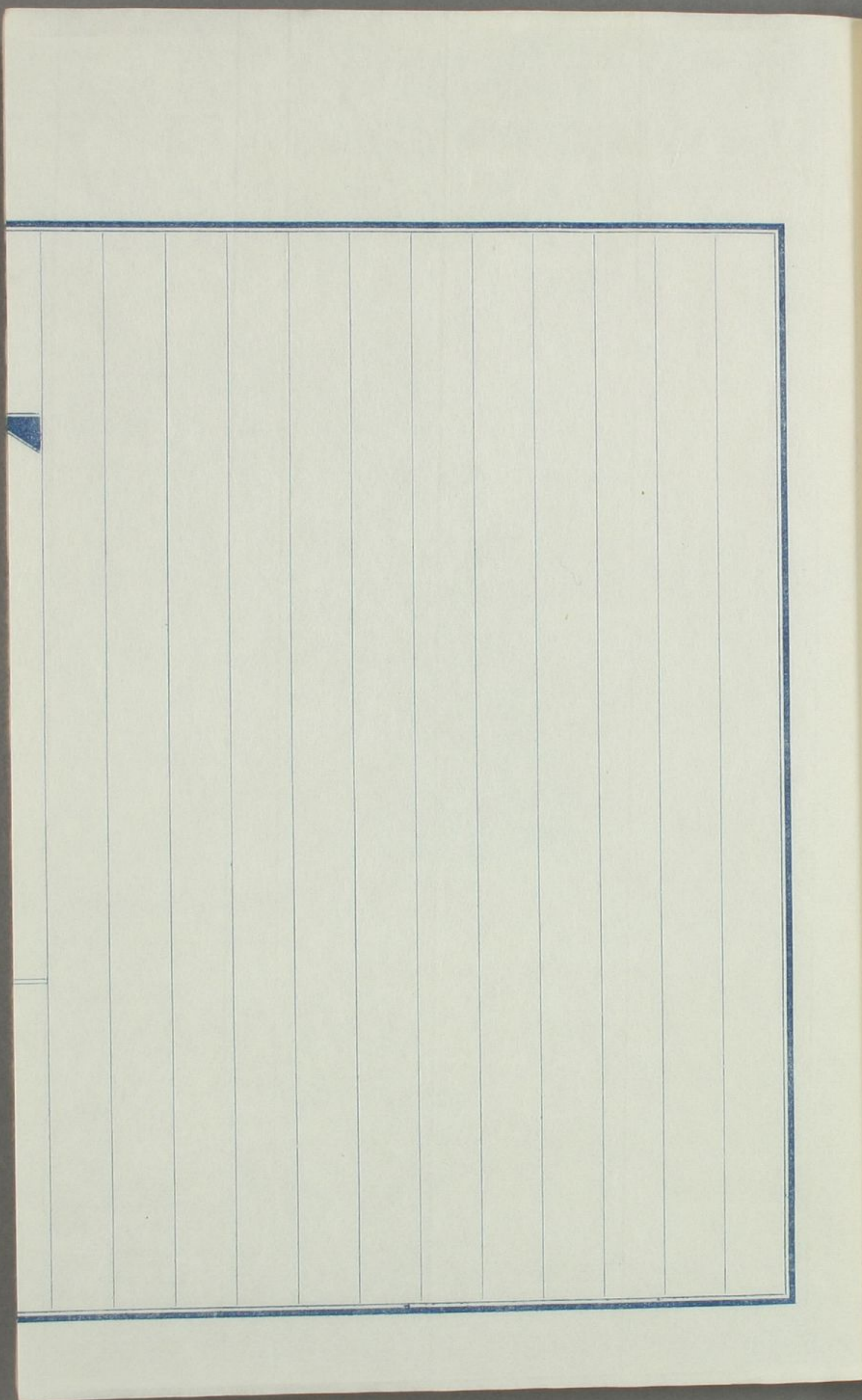
通信海發行 内閣印刷局製

標原製

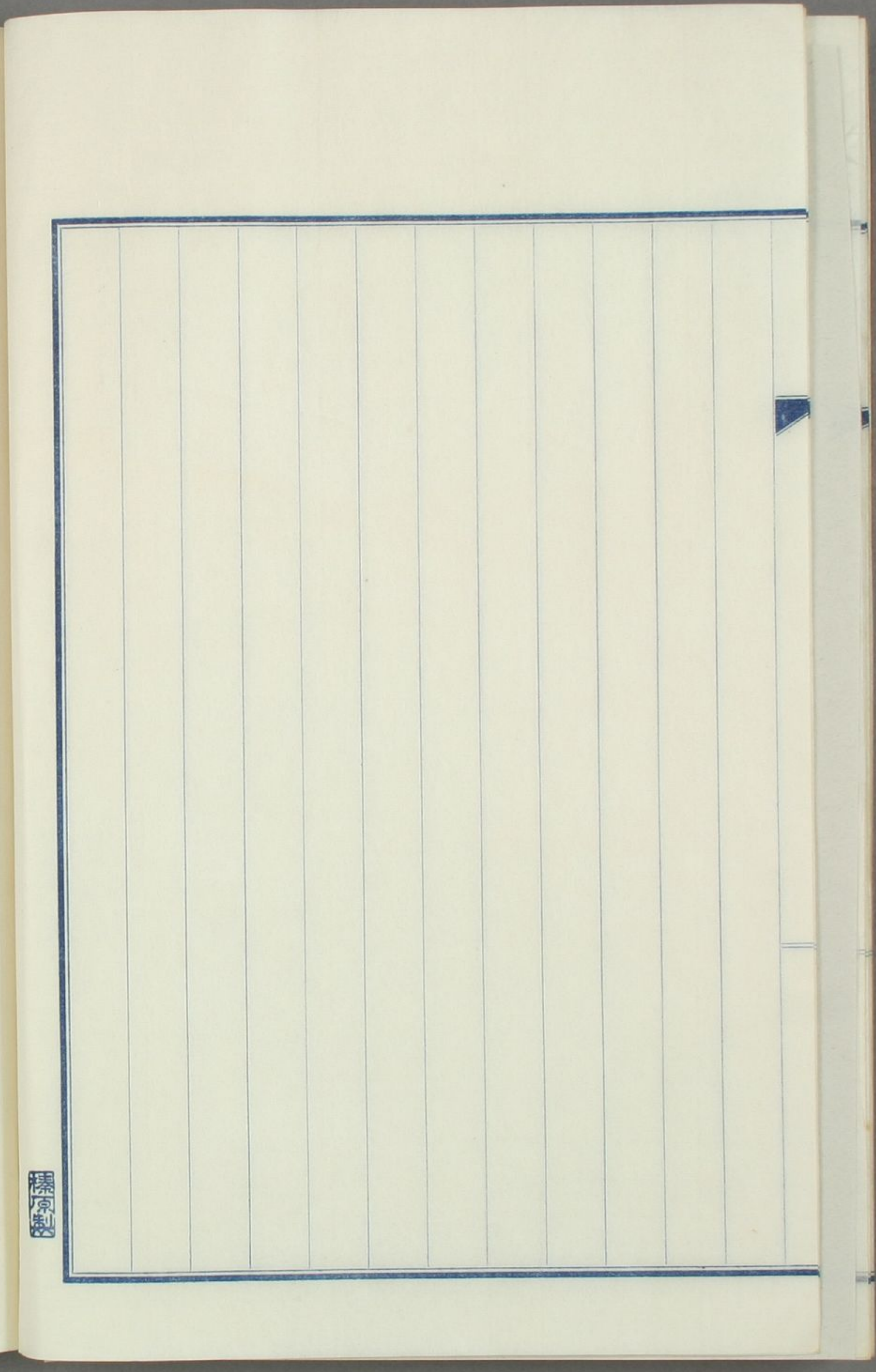
○早大出版部前田氏の少年日本史の才二冊は出れ、もう禁書も全の文かぬめりも、ゆづり上段校切りぬきのこと







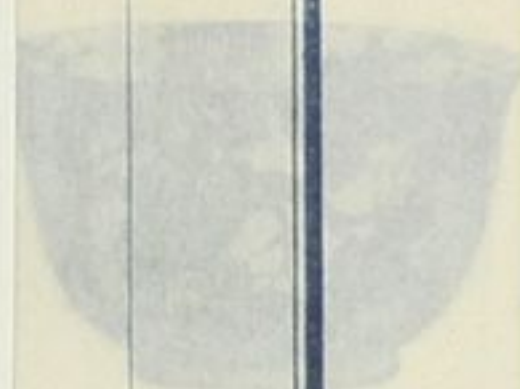
三十三





一茶翁木像

柏原俳諧寺藏



作箱六

奥西卷雲
桶谷定一
河村嶸山
河村太助
清水六兵衛
清水正太郎
清水祥次
北村陽山

淺見隆三
淺見與志三



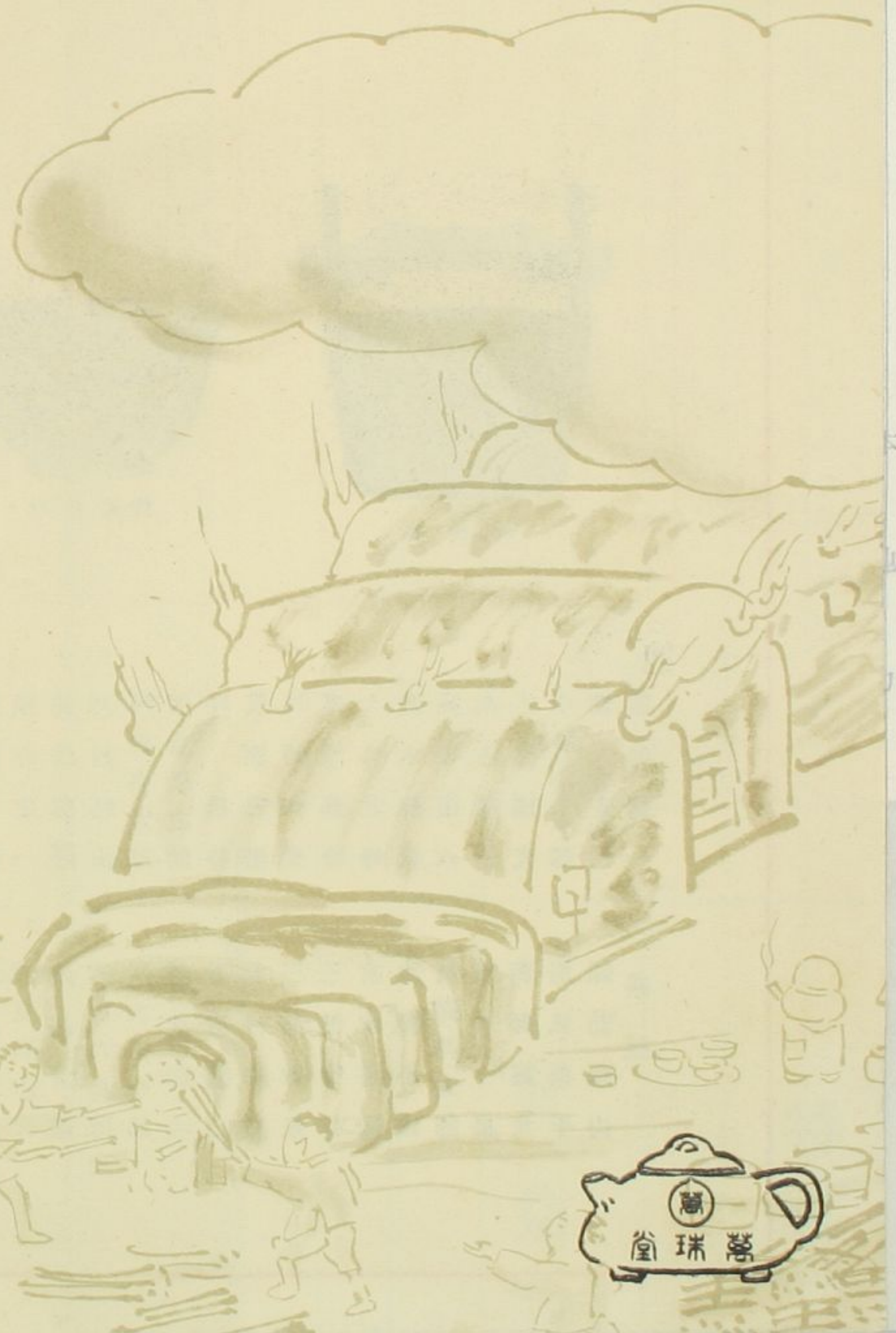
圖書集成

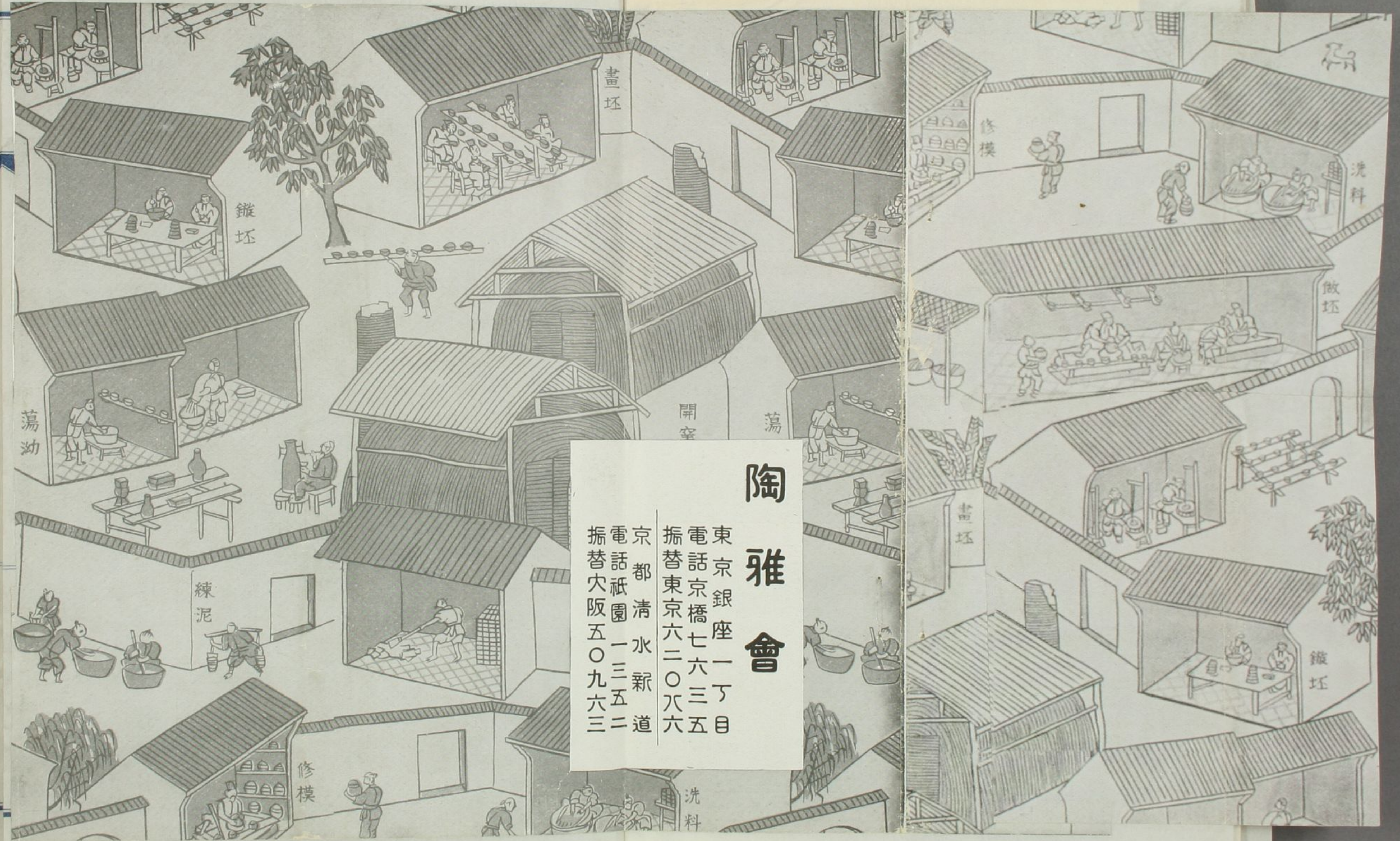
點數は五等分一編六十六點
 之を左の順に毎月配品致しま
 す。

五五五五五
 客客客客客



京室の圖
 山中花の虫

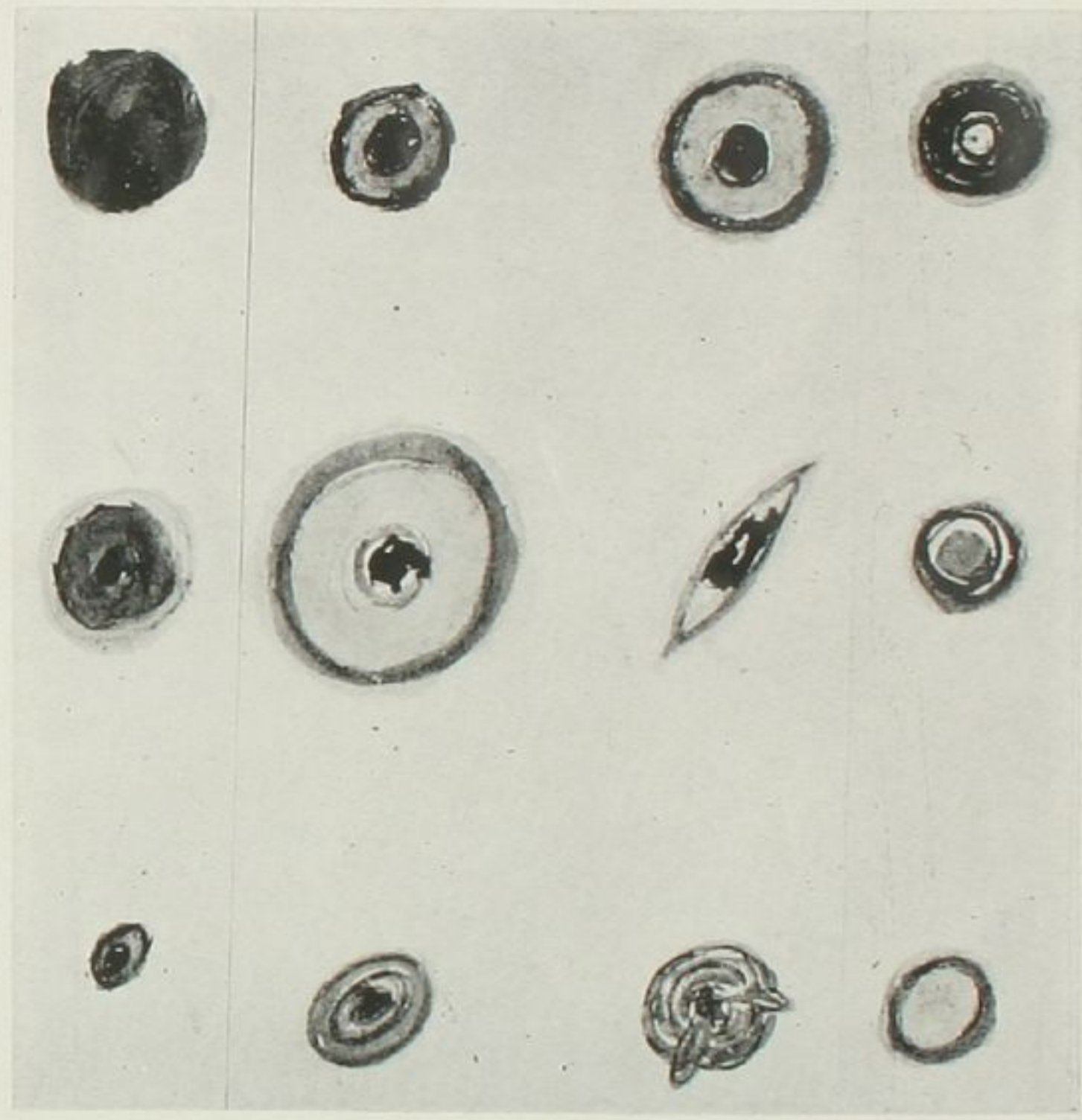




陶雅會

東京銀座一丁目
 電話京橋七六三五
 振替東京六二〇八六
 京都清水新道
 電話祇園一三五二
 振替大阪五〇九六三

研石眼之略圖



鸚鵡眼 鸚鵡眼 鸚鵡眼 鸚鵡眼
 鸚鵡眼 鸚鵡眼 鸚鵡眼 鸚鵡眼
 鸚鵡眼 鸚鵡眼 鸚鵡眼 鸚鵡眼

漢東製

雲坪先生の建碑

發起人代表 難波剛平



田代村竹田、渡邊華山、奥野無様、池大権等々の賞はる、所以のものはその間のみであること以外に、更にその作品の上に感動しつゝある作家自身の氣持を換言すれば胸奥に透する抑鬱が、崇高なる人格を透して發現する、不滅の品位それなのである。先生を推せよといふも未完成、未修養が至天賦の委林であつたなら、何なきものであらうと思ふ。この意味よりして我輩士無識が生める對垂の國人、長井雲坪先生の如

はなだらうか。その點において我輩先生は買に偉い人だつたと今更ながら考へさせられる。生活即藝術といふが先生は藝術のために一身をさしつけられ、藝術即生活の三昧境に生きておられた人であつた。藝術人の忍ぶ能はざる生活苦も世の苦難も、總てを雲煙過眼し徹底藝術至上に生きられた信念の人であつて苦境と闘ふことのやりに見える日常生活、それが雲坪先生にとつては寧ろ何よりの樂地であつたかも知れない程であつた、かゝる氣構へによつてのこされた作品なるが故に超凡庸であり、近來藝術界の寵兒として擧はれた天下風靡の士に選ばれるに至つたのではあるまいか。

更に我々の所望し得ざる點は先生が人間藝術としての温か味をもつて居られたことである。例へば一と度師として疑べる遺愛、嚴毅の意を用ふべく自ら肖像を描きこれを掲げて日々禮祭を缺かさざりしこと、叔父の戒名を認めて輓となし香華を手向くるを忘れざりしこと、先生遺愛の恩人たるフルベツキ宜敬師を召め、世話になつた人であれば、女中の末に至るまでその姓名を記し、故人に對してはその命日に必ず香華を手向け、特にフルベツキの地位には自ら描ける蘭花をそなへて感謝の意を表し、蘭花が如き、又たま／＼愛鳩の死に遭ふや、愛鳩の傳説に驚く先生用ふを忘れざりし等、なほ先生は弱民を憐れむの心深く、雲坪先生の許に來りて憐れみを乞ふものあれば、自らの衣食を割きて慰ませしことなど枚擧に遑まないのである。かくの如き一の總てが先生を愛する雲坪先生の人格の現れで、忘恩悖德、恩徳よりも薄いと稱さるゝ人間社會に於ける高尚の人物であつた。しかもこれを自ら巧

ころに先生の賞が賜はるるのである。

かゝる偉大なる人物を世せし我輩市であり、我々と郷を同じうする國人長井雲坪先生の遺業を永久に傳へ、一は以て郷士の誇りとし、一は以て我輩市に向上の勵の的たらしめんとするの爲め、我輩市に白山公園御手洗池裏池畔の地に碑を建て、六月二十九日、先生の入寂の日を期して除幕式を執り行する運びとなつた。何卒郷士の先賢を尊ぶことを忘れざるわが新市に大方各位に懇へ、趣旨の徹底を願ひたく、幸ひ貴分の御助力御支援を賜はらむことを以て、ここに掲げざるものである。なほ碑石は花崗岩の自然石高さ十二尺、幅四尺、重石彫刻高さ四尺、幅二尺、碑表の題字は春城、市馬、吉先生に御揮毫を請ひたることを附言す。(眞價は長井雲坪)

新市市に三月十日

新文句煙草のやんれ節

古堀 榮

文久元治頃流行したやんれ節に、煙草を詠み込んだ瓦板がある。彫り崩しの爲め少しく難解の所もあるが、大體左の通り判讀される。

さてもサア、イ、あわれなたばこのたねよ、煙草種子 春 彼の
岸詩 卸にまきおろされて、少シそたてはぢをかへらるゝ、地 松
又 太 下葉 掻 またふとれはしたはをかゝれ、下は上はとみはかきはけ
て、繩 挾 二階 吊 なはにはさまれにかへにつられ、けむいぶされいろ
つけられて、外 持出 露 打 そとにもぢたしよつゆにうたれ、膝 上 ひざにあけ

られのしひろけられ、伸 廣 小骨 大骨 皆 分 こぼねおふぼねみな取わけて、港 たゝ
みこまれてこまニとのせて、込 (切臺のこま) 乗 乗 間 無 又物 責 のせるまもなくはものてせめ
る、賣 五文三文の切うりされて、脚亂 煙草 どんたばこ入に入つめら
れて、腰 下 振 振 歩 こしにさけられふられてあるぐ、撮 出 つまみたされて火
さらいつかれ、血 注 つけはまもなく火ヲ付られて、吸 見 すうてみら
れてはしやよろこべと、妾 喜 げこな御人にすはれるときは、時
あまいからいあぐ口いはれ、甘 辛 惡 言 二度 にとゝなるまいたばこのたね
にヤンレイ、煙草 種子

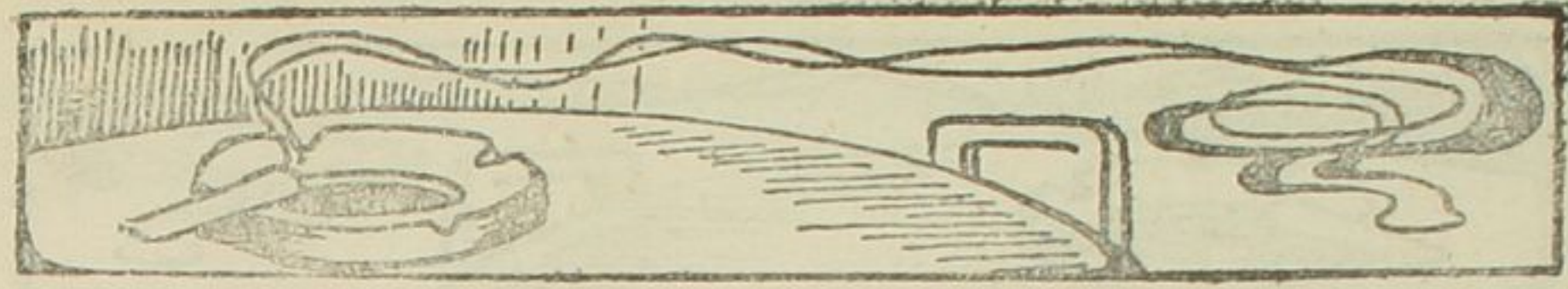
いと鄙びたる口調なるも、煙草の一生を詠み、野趣横溢の感がある。

新文句

ヤンレイ
さてもサア、イ、あわれなたばこのたねよ、
岸にまきおろされて、少シそたてはぢをかへらるゝ、
又 またふとれはしたはをかゝれ、下は上はとみはかきはけ
て、 なはにはさまれにかへにつられ、けむいぶされいろ
つけられて、 そとにもぢたしよつゆにうたれ、ひざにあけ



節れんや草煙句文新



不滅の火

市島春城

不滅の火

不滅の火と云へば、人は直ちに、筑紫の不知火を聯想し、火山を思ひ浮べ、大寺院の不滅の燈を想ふ。併しこれ等は必らずしも不滅ではなく、時に消長があつて、不知火は一部に限られた燐火であり、火山も間歇的で時に終熄する。大寺院の法燈も時に滅するの盛衰がある。但し世界の廣ろき何れの處にも間斷なく火が點せられて、嘗つて終熄を見ないのは喫烟の火である。古來種々の國土で峻嚴の法を設けて、此の火を止めんとしても、嘗て成功しないのは喫烟の火である。これこそ永久不滅の火であつて、烟草の歴史は乃ち不滅の火史である。

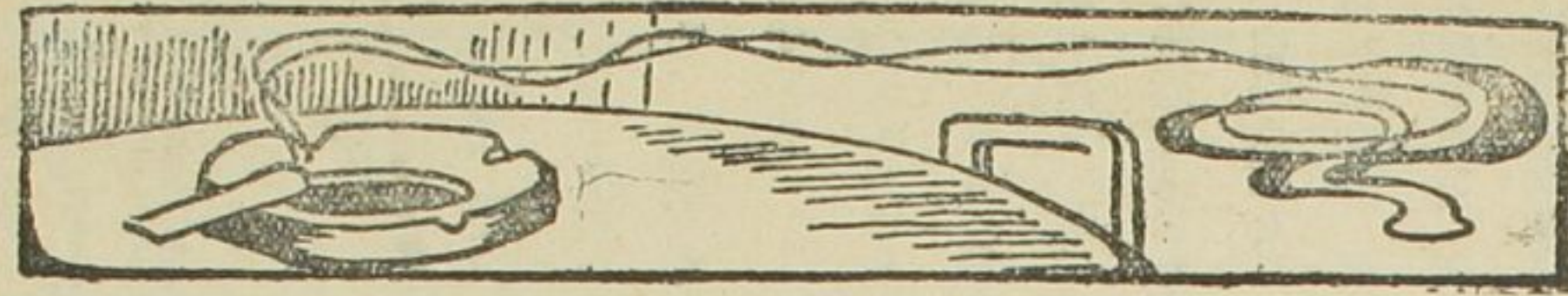
喫烟はもと蠻野の國から起つて世界を風靡するに至つた。喫烟の嗜好は人間の本能であるかの如く、此の嗜好に對しては、如何なる人も奴隸なることを甘んじ、烟草の前には皆跪禮を取つてゐる。纖弱の婦女子も、神經質の潔癖家も、仙人氣取の禁慾家も幾んど除外はない。此意味に於て此慣習の創造家なる蠻野人は世界を征服したと云ひ得るのである。

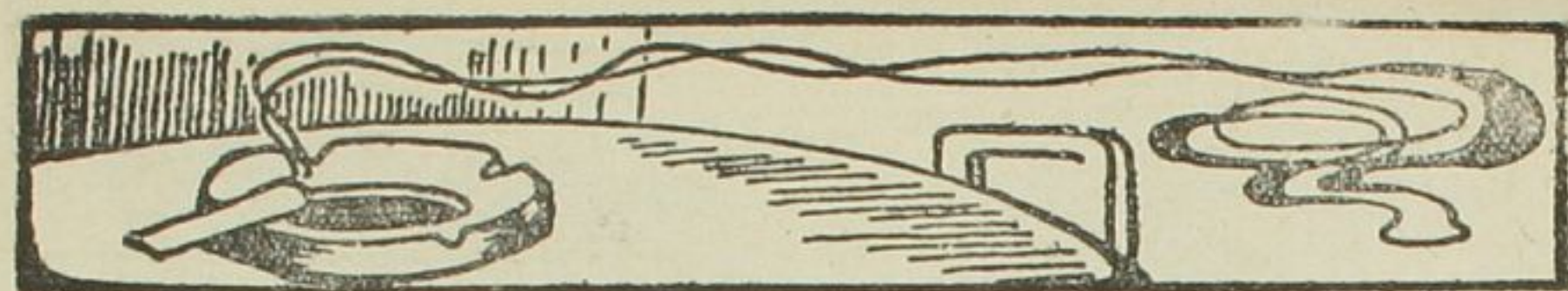
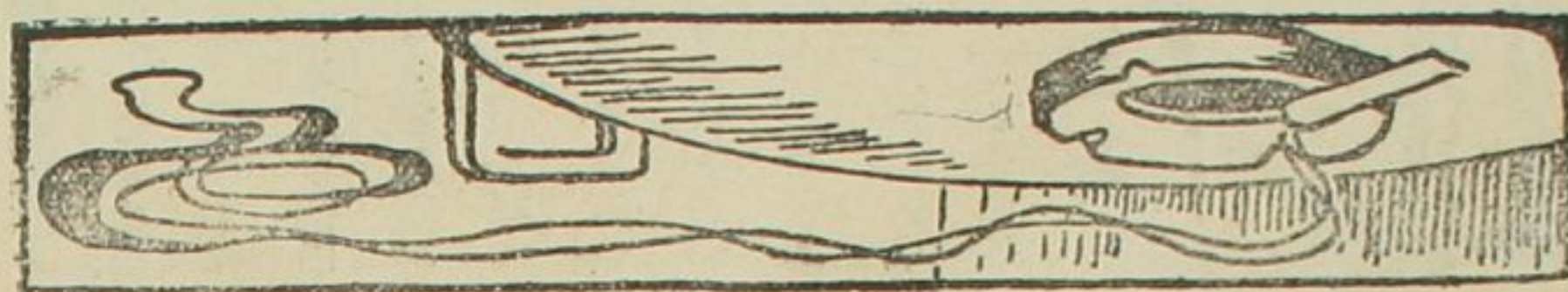
すべての飲食に火は離る可らざる關係があるけれども、それは臺所の事に屬し、常住起臥火と離れてはならぬ。密接の關係のあるのはひとり喫烟である。今は調法のマツチがあつて、喫

慾は實に豪勢のものである。凡そ火は物を亡ぼすもので多くの場合損あつて得のないものだが物を亡ぼして得するものは、烟草に限ると云ふも諛言であるまい。

虎は死しても革を留むと云ふが、烟草は火に亡びて文化を生むと云ふてよからう。國税の重なる部分を占める烟草税が、如何に日本の文化を扶けたかを想はねばならない。私の所謂不滅の火は實に文化を醗酵するの火である。それは烟草である。煙草は元來熱國の産で之れを喫するに火力を藉るなど兎角火に縁因がある。そして人間の情火、情熱、情焰も喫烟に負ふ所が頗る多いことを感ぜざるを得ない。大にしては經國の大策も小にしては詩畫の思索に到るまで喫烟の幫助に據るものが多い。火のある所に心華が開くと云ふべきであらうか、ビスマークは大の喫烟家が出陣中ポケットに僅かに一本のシガーが残つてゐた。その惜しい一本を割愛して瀕死の戦友に與へたのは友誼の發露であり、マジニーが亡命して龍動の客館に潜んで喫烟中刺客が闖入したのを驚きもせず、シガーを與へて先づ喫せよ、而る後爲さんとする所をなせと落着き拂つて沈勇を示し、刺客を屈服したなどいらくの逸事もあるが、皆烟草の火を藉りての心華の發揚に外ならない。

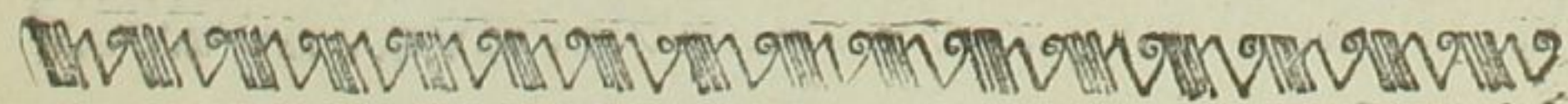
昔は仁慈の天子高き屋に登り民家に烟りの揚るをみそなはし、民の竈も賑はひにけりと喜ばれたが、今は吐月峰に烟の揚るのを見て民衆生活の賑ひを卜することになった。吐月峰に烟の擧らない家は寒く淋しい。概して幸福に恵まれない家である。工業の盛衰は烟突の多寡で判するとすれば、民衆の榮枯も鼻の烟突の烟の多寡で判すべきであらう。

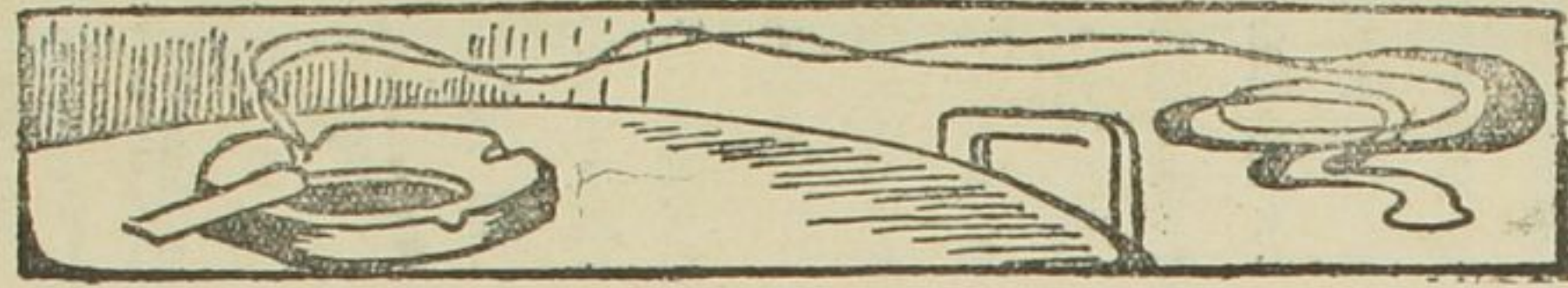
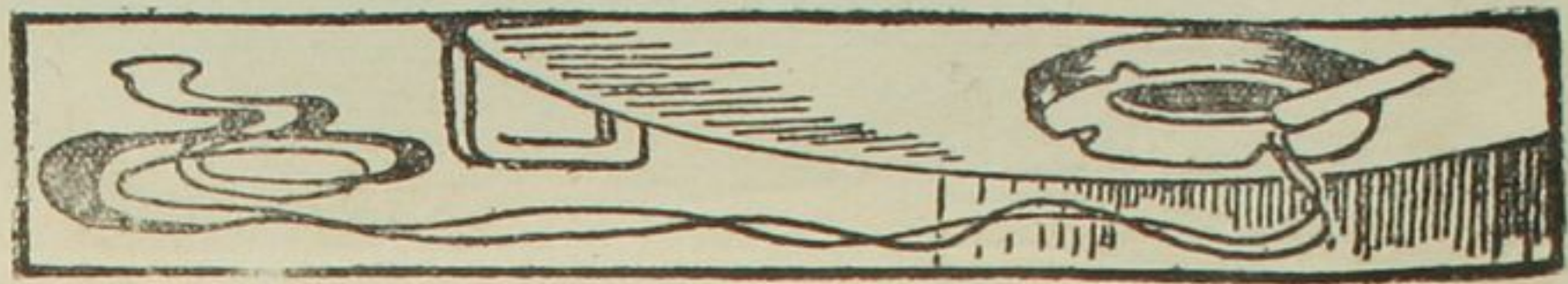




烟家は之れを常に携帯するけれども、これの無つた當時を想ふと、發火の具は原始的の燧石を鐵器を以つて打ち、其の發火を「ホクチ」と云ふ綿に移した時があつた。喫烟家は當時概ね燧石袋を携帯したが、それを携帯しない者は、外出中喫烟を欲しても火を得ず、或は田間の農夫に火を請ひ、或は相知らざる民家に就て火を請ふたりした。どうしても火を得られない時は遠く火山の噴烟を望んで嗟歎することもあつた。此頃には烟草の吹殻も次ぎの喫烟に大切な火源で、喫烟家はそれを棄てず、丁寧に掌の内に存して次ぎの喫烟の用に供したものであつた。マツチが行はれてからも、登山などの場合濕氣に侵されて、それが發火せず、喫烟家が悲鳴を擧げた例も澤山にある。

大抵の動物は人間と飲食の嗜好を同ふするけれども、喫烟だけは人間に限る嗜好で、之れは人間の特權である。或る喫烟家は人間の萬物の長たる所以はこゝに存すると云ふたが、或はそうかも知れない。世界の爲政家は或る時代に百方之れを禁遏せんとしたが、どうしても目的を達しないので、終に降参して、禁遏を斷念すると同時に、進んで之れを奨勵して國家の税源となすに至つた。爲政家の轉向も滑稽に近いけれども、實は賢明なる轉向であつた。明治の時代に岩谷松平が銀座街頭に天狗號のシガレットを賣り、「勿驚税金百萬圓」と暖廉に書いたのは當時人を驚かしたが、政府が後に烟草を政府のモノポリーとして今日に至つたことを思ふと、岩谷天狗の宣傳は誇張でなかつたことが知れ、今日專賣局の發賣するシガレット丈でも幾億の多きに達し、毎年増加の傾向がある。政府の收入もそれに伴ふて倍加しつゝある。その勢に乗じて近かく烟草の價を上げたが、その爲めに敢て販賣高を減することもないのを見ると、喫烟

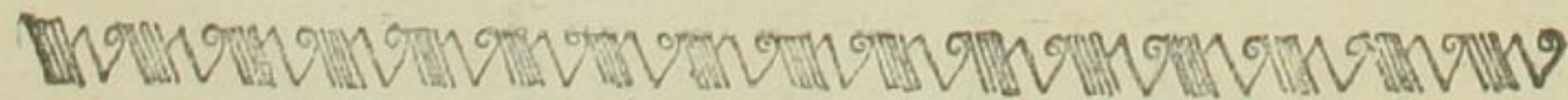




慾は實に豪勢のものである。凡そ火は物を亡ぼすもので多くの場合損あつて得のないものだが物を亡ぼして得するものは、烟草に限ると云ふも誣言であるまい。

虎は死しても革を留むと云ふが、烟草は火に亡びて文化を生むと云ふてよからう。國税の重なる部分を占める烟草税が、如何に日本の文化を扶けたかを想はねばならない。私の所謂不滅の火は實に文化を醗酵するの火である。それは烟草である。煙草は元來熱國の産で之れを喫するに火力を藉るなど兎角火に縁因がある。そして人間の情火、情熱、情焰も喫烟に負ふ所が頗る多いことを感ぜざるを得ない。大にしては經國の大策も小にしては詩畫の思索に到るまで喫烟の補助に據るものが多い。火のある所に心華が開くと云ふべきであらうか、ビスマークは大の喫烟家で出陣中ポケットに僅かに一本のシガーが殘つてゐた。その惜しい一本を割愛して瀕死の戦友に與へたのは友誼の發露であり、マジニーが亡命して龍動の客館に潜んで喫烟中刺客が闖入したのを驚きもせず、シガーを與へて先づ喫せよ、而る後爲さんとする所をなせと落着き拂つて沈勇を示し、刺客を屈服したなどいふ／＼の逸事もあるが、皆烟草の火を藉りての心華の發揚に外ならない。

昔しは仁慈の天子高き屋に登り民家に烟りの揚るをみそなはし、民の竈も賑はひにけりと喜ばれたが、今は吐月峰に烟の揚るのを見て民衆生活の賑ひを卜することになった。吐月峰に烟の擧らない家は寒く淋しい。概して幸福に恵まれない家である。工業の盛衰は烟突の多寡で判するとすれば、民衆の榮枯も鼻の烟突の烟の多寡で判すべきであらう。



けふは時の記念日

我國に於ける

機械時計の傳來

文献に現はれた時計の歴史

我國に於ける機械時計の傳來については從來諸説が區々として何れも信實し難いが、一説には室町時代の末期とも云ひ、他説には享保年間とも云はれてゐる「日本布政史」の中には西暦一五四一年我が

天文十九年の頃、葡萄牙の宣教師サプエルなる者が周防の山口に赴いて時の標題大内義隆に布教の許可を願うた時機械時計を献上したとあるその後天正十九年即ち西暦一五九一年にヨーロッパから歸朝した現四人の使節が外人宣教師に連れられて京師に於て秀吉に謁見しその時持つて来た時計を献上した事がある。慶長十一年に家康が伏見に於て時宣教師が時計を献上し

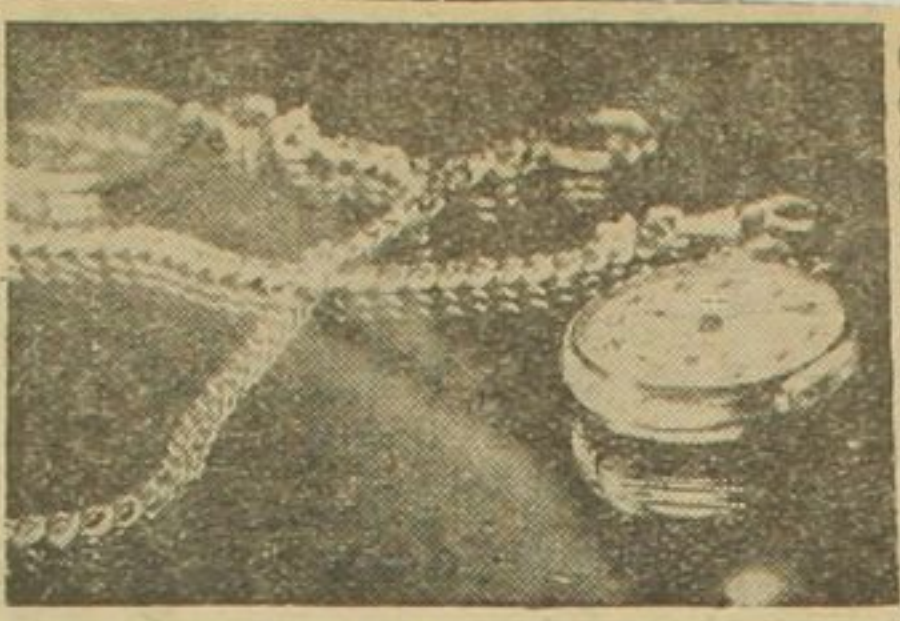
に關する記載の始めのやうである。以て時宣教師は種々と露出し土地としては長崎は、外國との通商上製造技術も最も發達してゐた事云ふまでもない。これに次で京都、大阪、名古屋、江戸、仙臺等各地に優秀な技工があらはれた。幕府においても御用への時計師達も置いたものである。この時代の



碁なくつす音爽やかに晋康 琴の舎

我が國に於ける時計の歴史は、西暦一五四一年に我が國に傳入された。この時計は、葡萄牙の宣教師サプエルが周防の山口に赴いて、大内義隆に布教の許可を願うた時、機械時計を献上したとある。その後、天正十九年即ち西暦一五九一年にヨーロッパから歸朝した現四人の使節が外人宣教師に連れられて京師に於て秀吉に謁見し、その時持つて来た時計を献上した事がある。慶長十一年に家康が伏見に於て時宣教師が時計を献上し、

けふは時の記念日



懐中時計の

臓腑を見れば……

チク／＼廻る天府輪 一年間三千五百哩

るわけで、その動きは一秒間に五回、一分間にはそれを六十倍として三百回、一年間には、實に億々べし四十三萬二千回といふ大へんな動き方を示します

☆ 今般に十六號(機械の直徑が一センチの十二分の一の十六倍あるもの)の時計の一回の振幅を一寸二分とすれば、これに四十三萬二千回を掛ければ、一月に九マイル六一年間には、何と三千五百〇四マイル

これは珍らしい
マドリッド製の時計
駿府久能山の寶物

これは珍らしい
マドリッド製の時計
駿府久能山の寶物

大きい時計

小さい時計

時計の大ききにもいろいろありますが、小さいものでは、日本の尺で現して見ますと、五ラインで機械の直徑が三分二厘(約一センチ)といふのがあつかうとおもふと大きいものでは、世界で一二を争ふ京の地下鐵の大時形(上野駅前)があります。これは、熊手前(前)のやうに地下鐵のストリアの前につけたもので、文字のやうな物、一センチと、天秤のやうな物、すい秒針が通つてゐますが、その長さが二十八呎、目方は七百五十ポンド、また、その秒針が一日に廻り歩く距離を計つてゐると四十マイルに及ぶといふ大へんなもので

懐中時計の機械を開けて見て驚くことは、その内部の如何に複雑してゐるかといふことです

☆ 形こそ小さいが、左右に動かし、勢ひで働いてゐるのが天府輪、齒車の先が鉤になつてゐるのがガンギ車、U型の噛み合ひ装置、これがアングル、この三つの部を總稱して、エスケープメントと稱へ、懐中時計の心臓部です

☆ 我國に時計が傳來したのは、足利将軍とされてゐますが、半鐘、時鐘などといふ言葉が用ひられてゐました。最初の渡來時計はマドリッド製のもので、これは久能山部に置かれてゐます。この

☆ 我國に時計が傳來したのは、足利将軍とされてゐますが、半鐘、時鐘などといふ言葉が用ひられてゐました。最初の渡來時計はマドリッド製のもので、これは久能山部に置かれてゐます。この

講演と演習

嘘を直ぐ発見する

ライ・デテクター

◆……電気利用の讀心術

後七時半

（早大心理學
教室から）

戸川 行 男
内田 勇三 郎 外



の金額、勝手にとつたトランプの札、持つてゐる煙草の種数や本数などをやつてみます。つぼしを指されても「い」と答へるその嘘

を察し當るといふ讀心術を行ふのです。實驗場は、二つの室になつてゐまして、實驗される人は暗い一つの室で電氣的に絶縁された椅子に腰をかけ、片手の二本の指を硝子管中の食鹽水の中に入れてゐます。この食鹽水から電線で別の室にある非常に鋭敏な電流計に連絡があります。實驗者は電流計のそばにゐて電流計のフルをみつめてゐます。實驗者が嘘をいつた場合には電流計の動きは最もはげしくなります。放送ではこの變化をピーツといふ音にしてお聞かせします。最も強い音の出たときは嘘をついてゐることがすぐわかるわけです。
（寫眞は嘘検出器で試験をしてゐる所（右）内田勇三郎、セビロ服正面は戸川行男氏（上）被験者が電氣の通じてある食鹽水に手を入れて實驗されてゐる所（下）早大心理學教室より）

戸川、内田兩氏は早稻田大學文學部講師で、人體の身體の電氣的現象を測つて精神の諸現象を認識せよといふ試みは、外國では相當昔から試みられ我國でもずっと以前に九大の醫科の博士のもとで高長富子氏が行つたことがあります。その後昭和七年頃には勞働科學研究所の上野義雄博士が色々として、昭和三十九年に特に心理學の方面から研究してみました。その當時私たちは嘘を識つた場合には人間の身體に大きな電氣的變化が現れることを知りましていくつかの實驗の例を発表いたしました。昭和十年に新聞の科學欄や外國雜誌リテラリー・ダイジェストで米國のキラー教授がこれを買用化して嘘検出器（ライ・デテクター）なるものを作つてゐることを知り、更に今年に入つてからは高柳賢三氏のラジオ放送でその實際の模様を知ることが出来ました。同氏は渡米中に小泉信三氏の一行と共にキラー教授の研究室を訪

研究

「い」と答へればよいのです。然し「ハートの九ですか」の問ひに對し「い」と答へた時は嘘をいつたことになりました。この嘘をいつた場合に被験者の身體には急激な電氣的變化が起るもので、その電氣的變化が被験者につなされた電氣變化を測るメートルつまり電流計で判るので、すぐ発見されるわけなのです。さて私達の教室でもその頃丁度實驗的に嘘をつかせる方法に名案がなく困つてゐた際でありました。早速こきでのライの方法を試みましたところ可成りの好成績を得ました。放送局からこの興味ある嘘検出器の實驗放送を依頼されましたからは大いに勇力をかけて研究實驗をつとけて参りましたところ

最近

では殆ど百パーセントに嘘をあてることが出来るやうになりました。實用化することに成功しました。今晚の講演では實驗される人の年齢、ガマ口の中

「九ですか」など聞くのです。その場で嘘をいふ場合にも「九ですか」などと聞いて「ハートの九ですか」と答へた時は、その場で嘘をついたといふことが分かります。この実験は、人間の身体に大きな電氣的變化が現れることを知り、昭和十年に新聞の科學欄や外國雜誌リテラリー・ダイジェストで米國のキラー教授がこれを買用化して嘘検出器（ライ・デテクター）なるものを作つてゐることを知り、更に今年に入つてからは高柳賢三氏のラジオ放送でその實際の模様を知ることが出来ました。同氏は渡米中に小泉信三氏の一行と共にキラー教授の研究室を訪

實驗

その場で、ライ・デテクターという機械を使い、嘘をついたかどうかを調べる。この実験は、人間の身体に大きな電氣的變化が現れることを知り、昭和十年に新聞の科學欄や外國雜誌リテラリー・ダイジェストで米國のキラー教授がこれを買用化して嘘検出器（ライ・デテクター）なるものを作つてゐることを知り、更に今年に入つてからは高柳賢三氏のラジオ放送でその實際の模様を知ることが出来ました。同氏は渡米中に小泉信三氏の一行と共にキラー教授の研究室を訪



部内共と宅氏井藤村川白國驛飛 内の集圖家民

藤原製

歐洲訪書記の中から (三)

吉澤
五月節

— 歐洲第一の漢籍蒐儲家ロトウール氏 —

神田喜一郎

歐洲には各國ともに支那美術品の蒐集家が多い。その中には名高い英國のユーモルホプロス (George Eumorphos) (Jos) 氏の如き、いまはその蒐集品を擧げて英國政府の藏に歸するに至つたけれども、支那美術品の蒐集家として實に世界に覇を稱へたやうな人さへも在る。然るに漢籍の蒐儲となると、さすがにそれとは全く事情を異にして、廣く歐洲にも殆ど藏書家らしい者が不在。歐洲に於て多少とも漢籍を個人として蒐儲してゐるのは、私の知る限り専門の支那學者のみであつて、それも僅に五六名を算へ得るに過ぎない有様である。その間に在つて、佛蘭西のロトウール (Robert des Rotours) 氏こそは、尤も大きな存在として先づ首指を屈せねばならぬ歐洲第一の漢籍蒐儲家であらう。ロトウール氏は元來佛蘭西名門の出である。私はその経歴に就いては深く知る所がないが、夙に碩學シヤバンヌ (Ed. Chavannes) 博士に従つて支那學を學び、博覽多識、尤も唐代の制度に精しい。その著書には

Le Traité des Examens, traduit de la Nouvelle Histoire des Tang (chap. XLIV, XLV), Paris, 1932.

の一卷がある。巴里のソルボンヌ (Sorbonne) 大學の内に近年設立せられた支那學研究所の叢刊 (Bibliothèque de

吉澤

L'Institut des Hautes Etudes Chinoises) の第二冊として出版せられたもので、その題目の示す通り新唐書選舉志の翻譯であるとはいへ、巻頭の百數十頁に互る序論や、本文中の精細綿密なる附注などによつて、その造詣の深さを如實に示してゐる。また各種の雜誌に發表せられた論文としては、私の寓目した所に

Les Grands Fonctionnaires des Provinces en Chine sous la Dynastie des Tang(T'oung Pao, vol. XXV, 1927.)

La Lutte à la Corde (Pa-Ho 拔河) en Chine. (Journal Asiatique. Tome CCXXIV, 1933.)

などがあるが、いづれも唐代の制度や掌故に關する興味ある研究である。その他、白耳義の首都ブルツセル(Bruxelles)の支那學研究所(Institut Belge des Hautes Etudes Chinoises)の報告書“Mélanges chinois et bouddiques”の第二冊(一九三三年發行)に寄稿せられた所の“Notes bibliographiques sur les ouvrages de sinologie parus depuis 1929”と題する一文の如き、固り新刊紹介のことゝて經意の作ではないけれども、氏の關心と興味とがいかに廣く支那學の各部門に互つてゐるかを窺ふに足るものである。以上の著作によつても、今日氏が佛蘭西の支那學界に占める地位は相當に高く評價してよい。その支那語に堪能であることゝ、それにもまして漢籍を自由に且つ正當に驅使し得る力量を具へてゐることゝは、佛蘭西の支那學界に於て、現在ペリオ(Paul Pelliot)マンスロ(Henri Maspero)の兩先生を除けば、恐らく氏の右に出る學者は無からうと思ふ。一九三五年の四月、亞細亞學會(Société Asiatique)の例會の席上、私はドウシエウキル(Paul Demiéville)から氏を紹介せられたのが初まりで、爾來一年に餘る巴里滞在中、大變に親切にして貰つた。氏は名門の出であるだけに、資性濃厚、氣品の高い君子人である。巴



L'Institut des Hautes Etudes Cl

の

Les Grands Fonctionnaires d

1927.)

La Lutte à la Corde (Pa-Ho

の

xelles) の

diques" の

parus depuis 1929" の

の

無

の

Maspero) の

Asiatique) の

の



部内共と宅氏井藤村川白國驛飛 内の集圖家民

飛驒國白川村井藤氏宅内

GAKUTO

No. 5

41st year



MARUZEN CO., LTD

里の近郊ヴキロフライ (Vireflay) に在る宏壯な邸宅は、その場所といひ建物といひ、一寸我が静嘉堂文庫を聯想せしめるものがあるが、こゝに漢籍十數萬卷を擁して悠然と讀書三昧に耽つてゐる氏の清福は、洵にわれわれの健羨に堪へぬものがある。

佛蘭西で尤も大きな漢籍の蒐集はいふまでもなく巴里の國民圖書館 (Bibliothèque National) である。然しこれは最初から系統的に蒐集せられたものではなく、言はず漢籍の雜然たる一大堆積に過ぎない。中には天下の孤本ともいふべき珍籍も在るには在るが、また愚書も極めて多い上に、當然無くてはならないものが殆ど備つてをらぬといふ有様である。従つて研究の上からは如何う見ても實用的ではない。尤もさういふ缺陷を補ふ目的を以て、一九〇九年にペリオ先生が同圖書館の爲に支那から齎された漢籍の一大蒐集もあるが、それさへその目錄 "Répertoire des (Collection Pelliot A) et (B) du fonds Chinois de la Bibliothèque National." (T'oung Pao, vol. XIV) によつても分る通り、今日ではも早大分古くなつてゐる。それで今日の日進月歩の状態に在る支那學研究に應じ得るだけの系統的な整備せられた漢籍の蒐集としては、第一にソルボンヌ大學内に在る支那學研究を擧げねばならない。こゝにはその性質上國民圖書館と違つて、天下の孤本といふやうな珍籍は殆ど見當らぬが、その代りに、實際の研究に必要なものは、各方面に互つて、實に能く行届いて蒐集せられてゐるのである。聞く所に據ると、この支那學研究所を現在董事 (Administrateur) として主宰せられてゐるのはグラネ (Marcel Granet) 氏であるが、専ら漢籍の蒐集を指導せられてゐるのはペリオ先生であるといふ。固りその惡からう筈はない。所でこれより更に一層整備せられた一つの大きな漢籍の蒐集が巴里に存在するのである。そのロトウール氏の文庫であることは言ふまでもない。私はこ

れを參觀して、餘りにも能く整備してゐることに、實は少からず驚かされたのであつた。これだけの實用的な研究本位に出來た立派な蒐集は、我が國にもさう多くは存在せぬ筈である。無暗に稀書珍籍ばかりを蒐集して、鬼面人を嚇すが如きは、決して學者としての能事ではなく、私はロトウール氏がさういふ眞似をせないで、支那學に對する深い理解と共に、不斷の精進と周到なる注意とによつて、かゝる立派な蒐集をせられた學者的態度に對して、茲に滿腔の敬意を述べたいと思ふ。



東西紫烟風俗志

Le Tabac

Le Livre des Fumeurs et des Priseurs
Par **Spire Blondel**

Avec 113 illustrations de G. Fraipont, dont 16 hors texte en couleurs
(19×27.5 cm.) xvi, 296 p. Paris, 1891.

¥ 19.50

◆喫烟こそは神さへも知らぬ人類の愉樂である。亞米利加インディアンの習俗が一度ジョン・ニコオに依つて歐洲に齎らさるや、紫烟の魅力は忽ちに全世界を領し盡して、幾多の禁壓が試みられたにも拘らず、遂に人間社會に絶ゆることなく今日に至つた。パイプ、葉卷、紙卷、さては嗅煙草、嚙煙草と、その種類も多く、また時代と國土の異なるにつれて、愛煙の様式習俗も同一でないが、とにかく飲酒とならび二大慰樂となつて吾人の生活を和まして來た事實は否むべくもなく、その由來變推の跡を辿ることは、同時に人間文化史を語るに等しいものがある。ブロンデルがこの煙草史も、即ち栽培、製造の方法を詳述するに終らず、これを愛用する諸國風俗を傳へて盡くる所を知らず、しかもそれら事象を通じて一脈の喫煙哲學をさへ語つてゐる點、愛すべき人間の讀物となつてゐる。例へば烟具の異なる様式に依つて、諸國の民族精神をトし、パイプの長短に徴して彼等の勤怠を知り、更にパイプの大小に經濟觀念の精粗を知るなど、微笑ましき發見を結論として告ぐるなど、以て本書の一斑を示すものである。着色共百十餘の銅版挿繪、すべて愉しき紫烟氣分を體し、華麗なる装幀を得て愛煙家の書架を飾るに足る◆



ルイ十四世朝嬪妃の喫煙

